氏　　名(本籍)	**吉田　政博**（東京都）
学 位 の 種 類	博士（歴史学）
学 位 記 番 号	博歴乙第29号
学位授与の日付	令和２年３月19日
学位授与の要件	学位規程第５条第２項該当
学 位 論 文 題 目	**中・近世の東国における宗教とその展開**
論 文 審 査 員	主査　駒澤大学教授　博士（日本史学）　中野　達哉
	副査　駒澤大学教授　文学博士　久保田昌希
	副査　駒澤大学教授　林　　譲

論 文 内 容 の 要 旨

本論考は、十五世紀後半の室町幕府体制の衰退以降の、いわゆる「戦国期」・「戦国時代」における東国を中心とする宗教に関する諸相について、その実態面を解明することを主目的に論究を行った。論考の中では、中世仏教と近世仏教との接続やその継承、変化などの点に留意し、東国の地域社会における宗教の展開とその特質の解明を主眼に置き論述した。論文は四編構成で、前後に序章と終章を付した。

第一編「戦国期、東国における時衆・浄土宗・真宗」では、駿河国の事例を中心に戦国期における時衆の動向を検討した。その中で、一花堂長善寺が、藤沢山焼失により時衆遊行派の本山格の寺院として機能し、十二世乗阿などの学僧を輩出するなど、今川領国下での「戦国文化」の拠点となっていた点や、中世時衆の特色の一つであるアジール機能を有する「客寮」が、連歌師宗長との交流の場となっていた点などを明らかとした。また、「戦国期における陣僧と陣僧役」では、鎌倉末期に出現した戦陣へと赴く「陣僧」の、戦国期における実態面について論究した。当該期における陣僧の活動実態が大きく変質する中で、永正期での駿河・甲斐間での紛争に、時衆が檀那福島氏の陣僧として参陣し、合戦後の平和交渉役や戦後処理にあたった状況から、当該期における宗教者の立場や役割を検証した。

「中世武蔵国における浄土宗の展開過程」では、下総国から教線が伸びた浄土宗派の一つである白旗派が入間川の下流域にあたる豊島郡域とその周辺地域に展開したという特徴を指摘した。また、明応年間の増上寺創建については、開山聖聡と弟子たちが江戸周辺地域に寺院を積極的に創建し、学僧を育成するなど、関東浄土宗発展の基盤を構築したという点を強調した。なお、浄土宗と領主との関係として、小田原北条氏による領国支配が進展とともに、家臣大道寺氏の血縁である感誉を中心に、永禄期以降の武蔵国における浄土宗の展開を確認した。また、豊島郡内の板橋地域に目を向け、在地

の領主である板橋氏と、その出身である浄土僧、本誉利覚との事蹟を検討し、近世の旗本板橋氏に引き継がれていく深い結縁を確認することができた。「戦国期、武蔵国多摩における浄土宗の展開と浄土僧」では、武蔵国多摩地域において活躍した浄土僧牛秀の事蹟を中心に検証を行った。その中で、北条氏照との結縁関係に論究し、また檀林滝山大善寺の建立などを通じた牛秀による学僧の教導と江戸期における関東浄土宗の発展への影響について論じた。なお、関東における浄土宗の拡大は、徳川家康との連関を基礎にした関東入国後が顕著とされているが、本論考の結論からは、その基層は小田原北条氏領国下ですでに形成されていたと位置づけた。

第二編の真言宗に関する検討では、「武蔵国豊島郡・新座郡における高野山信仰」で、当地域における高野山信仰について、高野山西南院が所蔵する「関東過去帳」を分析して検討を加えた。戦国期から近世初頭にかけて高野山信仰を受容した人びとを、在地の開発行為を指導し、経済力を背景に地域の寺院の開基檀越となりうる階層ととらえた。また、高野山信仰の取次役については、両郡内に展開する真言宗石神井三宝寺の末寺との連関が認められ、在地において拠点化し、日常の宗教活動にあたる真言僧は、檀家と家族への引導・祭道の執行を可能とし、そこに取次ぎ機能が担保されたものと位置づけた。当該期の在地状況などを検証する上で、これら「過去帳」の有効性をさらに実証する必要が認められる。次に「中世東国における「西国」への参詣について」では、熊野・西国巡礼・高野山・四国への参詣活動の実態と時代的な変遷を検証した。また、その参詣活動の基盤には、聖・山伏・修験・時衆や真言僧などの宗教者による広範囲な活動実態が認められる。

第三編での熊野信仰・富士信仰に関する考察では、新出史料を紹介し、下総国葛西御厨・相馬御厨・下河辺荘における熊野信仰の展開と在地の状況を論究した。「戦国期における本山派修験の展開と領主との関係について」では、当該期の北条氏配下にあった玉滝坊や不動院の動向と、関東各所で顕著にみられる修験勢力の拡張問題、修験間の争論にみる領主北条氏の関与と裁許の実態、それに対する聖護院の「認可」の有効性などを論証した。結果、北条氏領国においては、本山と在所の関係性については、天正七年に大きな画期が訪れたものと評価した。「武蔵国豊島郡における熊野信仰の展開」では、武蔵国豊島郡における熊野信仰の展開について、当地を支配していた中世豊島氏との関係性と、東国の熊野信仰の拠点であり、熊野三山領となった豊島郡の状況を総合的に論証した。「戦国期の富士参詣道者と御師の活動」では、戦国期の富士参詣道者と富士北嶺の登拝地、吉田と河口の富士山御師の活動について、武田氏・小山田氏などの領主による富士信仰への対応を中心に論証した。また、大名領国を縦断する参詣活動の実態から、当該期の富士信仰の広がりと御師の歴史的性格などを論究した。「近世板橋地域の富士講と富士信仰の受容」では、「富士講」の中興として知られている伊藤身禄と、その側近である中山道下板橋宿平尾を拠点とする行者、永田長四郎の事蹟を中心に検証を行った。また、名門講社「永田講」の構成を分析し、当該地域の富士信仰とその受容層について解明した。結果的に江戸の都市部における富士信仰の爆発的な広がりと、周縁部の上板橋村などでの受容の時期は同一であり、都市部と密接した富士講の近郊地域への展開過程の特性を提示することができた。

第四編の曹洞宗関係では、「武蔵国豊島郡西台圓福寺所蔵の「太田道灌像」について」で、道灌開基の板橋区西台にある圓福寺が所蔵する坐像について、その服装表現などから、坐像は江戸期に作成

された当寺の開基「太田道灌像」に比定をした。その上で江戸期において圓福寺を含む道灌ゆかりの六ヶ寺に安置された道灌像の動向について論究した。「中世末期から近世初期における東国の温泉について」では、上野国草津・伊香保を事例とし、当該期の温泉地の構造や機能、信仰形態などを論証した。各地の温泉には、多数の湯治客が数週間の湯治期間で滞在し、宿泊施設が整備され、その維持管理には、湯銭（温泉使用料）や、湯大明神・温泉薬師などへの勧進が充てられるなどの特徴が検出できた。信仰面では、衆生の病気や無明の病の救済にあたる薬師如来が礼拝対象となり、その伝播の担い手に山伏や聖などの宗教者の存在が認められた。施浴などの社会活動や禅僧の修行の場という性格も含め、温泉地の「アジール」性の継承と歴史的変容過程などについて解明した。

論考を通じ、中世から近世へと移行する中で、中世宗教（とくに仏教）が、各地の大名や領主との間にいかなる関係を築き、どのような役割や機能を果たしていたのか。またその教線や勢力を拡大しえた要因は何かという課題を提起した。結果、中世宗教と大名・領主との相互の関係性を再確認するとともに、当該期の各寺院や各宗派の自律的な展開と教線の拡大が、大名領国の形成過程に連動するかたちで進展していた点を論証した。

次に、当該期の仏教諸宗派が、どのようなかたちで地域社会に展開し、受容されていったのか。また近世宗教へどのように継続されたのかという問題を提起した。結果、戦国期における仏教勢力の展開について、十五世紀を宗教と社会の関係性の画期とし、鎌倉仏教の諸宗派が「戦国仏教」として地域に本格的に受容さていく過程がみられた。

一方で、東国の戦国期から近世初期における在地社会と宗教勢力の浸透などの実態については、史料的な限界が大きく、極めて限定的であり、全体を網羅するうえで非常に困難な状況が認められる。その中で、高野山院家が所蔵する「過去帳」に注目し、これを高野山信仰の実態と地域への展開過程の検証などを超越した、各地域の、在地の状況を直接的に明らかにするポテンシャルを有する史料として評価した。とくに東国の戦国、近世初期の在地社会に対するこれまでの見解を再構成しうる、貴重な歴史的財産と結論づけた。

最後の課題としては、時衆・御師・先達・修験（山伏）・聖といった、「遊行」の宗教者が、当該期にはどのような性格を持ち、活動していたのか。宗教が本来的に有していた「アジール」性はどこまで機能しえたのか。という問題を提起した。

網野善彦氏は、中世末期から近世にかけての国家権力による「無縁」の原理の取り込みの進行によって、アジールは衰退し、終末段階を迎えるとするが、本論考では、中世宗教の地域展開と在地社会への浸透や受容といった問題に加え、論文全般を通じて、中世末期の「アジール」の実態についての論究を試みた。その中で、山岳や聖地といった神仏が支配する「場」や、温泉といった共同の「場」の問題を取り上げるとともに、当該地を拠点化し、その参詣活動の担い手となった、時衆、御師、修験、山伏、先達、道者、聖、真言僧など宗教者の実態と広範囲かつ活発な行動について、検証を加えた。また、時衆などの宗教者が有する本来的な「公界」者から派生する、「敵味方のきらいない」中立的機能とその変容などについても論究した。なお、これらの検証においては「俗」の象徴ともいえる「戦国大名権力」との連関性を意識する必要が認められる。

今後は、中世宗教をめぐる多様な要素が、江戸期の社会の中で如何に継承され、機能し、存在しえたのか、あるいは、社会通念や宗教観の中で如何に理解されていたのかなどについても、継続して実証していく必要があると考える。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

Ⅰ．はじめに－研究課題と構成－

このたび、吉田政博氏が提出した学位請求論文は、「中・近世の東国における宗教とその展開」である。本文 427 頁（1 頁＝ 40 字× 20 行、400 字詰め換算で 854 枚）におよぶ。

本論文は、日本の中世から近世にかけての東国における宗教の展開を、宗教者の機能や動向、さまざまな信仰の展開の様子に視点を据え、その特質を明らかにすることを目的とし、考察したものである。

本論文の構成（目次）は、以下の通りである。

序章　戦国期における宗教研究の動向と研究課題
第１編　戦国期、東国における時衆・浄土宗・真宗
　第１章　戦国期、駿河における時衆の動向
　第２章　戦国期における陣僧と陣僧役
　第３章　中世武蔵国における浄土宗の展開過程
　第４章　戦国期、武蔵国多摩における浄土宗の展開と浄土僧
　第５章　下総国における関東真宗
第２編　戦国期の東国における真言宗と「西国」信仰
　第１章　武蔵国豊島郡・新座郡における高野山信仰
　　付論１　上総国における高野山檀那所争論の背景
　　付論２　武蔵国三宝寺住持賢珍と山科言継
　第２章　中世東国における「西国」への参詣について
　　付論３　下総国相馬郡における天台宗・真言宗の展開
第３編　中世・近世の東国における熊野信仰と富士山信仰
　第１章　中世東国における熊野信仰の展開
　第２章　戦国期における本山派修験の展開と領主との関係について
　第３章　武蔵国豊島郡における熊野信仰の展開
　第４章　戦国期の富士参詣道者と御師の活動
　第５章　近世板橋地域の富士講と富士信仰の受容
第４編　戦国期における曹洞宗の展開と文化
　第１章　下総国相馬郡正泉寺と信仰・文化
　第２章　武蔵国豊島郡西台圓福寺所蔵の「太田道灌」像について

第３章　中世末期から近世初期における東国の温泉について

付論４　武蔵国豊島郡赤塚松月院関連史料について

終章　中・近世の宗教の展開とその特質

Ⅱ．論文の内容と評価

序章では、本論文のなかでも核となる戦国期を中心に東国社会における各宗派と修験などについての研究史を概観し、これまでの研究動向のなかで明らかになった成果と問題点について述べ、本論文で取り上げる課題を提示している。研究史については、本要旨では紙幅の都合上詳しくは触れないが、序章であげられている課題はつぎの３点である。①中世の宗教（とくに仏教）が、大名などの領主との間にどのような関係を築き、役割や機能を果たしたか、そして、そうした関係のなかで教線や勢力を伸ばし得た要因について、②中世における諸宗派の地域展開の様相と近世への継続について、③時衆・御師・先達・修験（山伏）といった「遊行」の宗教者の性格と活動、そしてその「アジール」性について、それぞれ解明することであり、多角的･総体的に捉えることを試みようとしたものである。

こうした課題をもつ本論文では、各編各章において、以下のように論考する。

第１編では、戦国期を中心に諸宗派の動向を分析する。

第１章では、駿河国を事例として、時衆の動向を追う。藤沢山焼失後、一花堂長善寺が遊行派の本山格の寺院として機能していたことを明らかにし、一方で、当寺は戦国から近世初期に活躍する学僧を輩出し、宗学のみならず国文学の分野でも多大な業績を残したことを指摘し、戦国期の文化的活動の最先端を形成していた今川氏領国下での「戦国文化」の拠点であり、その興隆の背景には駿河への下向貴族の存在があるとともに､時衆がこれら知識層と交流を深めていたことを確認している。また、宝樹院は今川一族や貴族の子弟が入寺するような格式を有する寺院であり、宗教・文化面において中心的な役割を果たしたと位置づけた。時衆の動向を丹念に追い、戦国期において領主層に関わりながら宗教・文化面ともに展開していった点を指摘していることは興味深い。

第２章では、戦国期の「陣僧」について、役割と課役の両面から捉えて分析する。戦闘方法が著しく変化した戦国期において、陣僧の役割も苛酷・危険なものとなり、そこでは陣僧のもつアジール性が弱まったことを指摘するが、その一方で合戦後の平和交渉役として活躍していたことを確認する。また、陣僧役については、時衆だけでなく各寺院に賦課され、現夫としてかり出され、各寺院にとって最も苛酷な役のひとつであったと位置づける。そして、この陣僧役の賦課に対する各寺院の忌避・免除の動きを大名権力が捉え返し、寺院勢力を自らの支配に組み込む手段として利用していたことも指摘する。これまであまり研究がなかった戦国期における陣僧についての理解を深めた論考として評価できる。

第３章では、中世武蔵国における浄土宗の展開について論考する。まず、鎌倉期に浄土宗白旗派が入間川下流の豊島郡域や周辺で展開している点に注目し、寺院が河川・陸上交通の結節点、すなわち要衝の地に立地していることを指摘する。そして、当該期の寺院勢力が河川・陸上交通に一定の役割を果たしていたとする。つぎに明応年間に創建された増上寺が学僧の育成などの基盤を構築し、浄土

宗の発展に大きな転機をもたらしたという。その背景には太田氏との強い結縁があり、同氏の外護があったとする。さらに永正期には政治情勢を受けて創建寺院数も激減し停滞期となるが、その後、小田原北条氏の支配の進展にともない、同氏と密接な関係をもつ僧侶が出現し、浄土宗の展開に影響を与えていくこと、また、板橋地域では同地を支配する板橋氏と関わりの深い僧侶が出現したことを確認する。先行研究の多くは僧侶や寺院だけをみて宗派の展開を論じるきらいがあるが、流通・経済や政治情勢と結びつけて、宗派（浄土宗）の展開を分析していく視点は、評価できるものである。

第４章では、同じく浄土宗について、戦国期から近世初頭にかけての多摩地域の状況を中心に考察する。ここでは、多摩地域において活躍した応蓮社讃誉助給牛秀をはじめとする僧侶を取り上げ、浄土宗の展開をみる。これまでの研究では、天正 18 年（1590）の徳川家康の関東入国と増上寺の関係の成立が関東における浄土宗の展開に大きく寄与したとされているが、それ以前から基盤が形成されていたと位置づけるのは重要な指摘となろう。

第５章では、下総国における浄土真宗の展開について考察し、水上・陸上ともに交通の結節点となる地での展開があったとする。また、こうした同じ結節点を拠点としたことから、浄土宗との共通性を見いだしている。

第２編では、戦国期における東国での真言宗の展開と、「西国」の霊地への信仰について考察している。

第１章では、高野山西南院所蔵の「関東過去帳」の分析を中心に、東国社会において展開した高野山信仰について検討する。高野山に所在する過去帳は、以前は研究の対象ともならず、過去帳の分析から東国での信仰の様子を考えた研究は数少ない。本論はその数少ないうちの一つであり、高野山に伝来する過去帳だけでなく、東国すなわち関東に残る古文書をはじめとする諸史料と照合し、戦国期の高野山信仰や社会の様子をまざまざと描き出そうとしていることは特筆すべき点である。そうした研究を踏まえ、高野山に伝来する過去帳を史料として非常に高く評価している。また、在地の真言宗寺院が高野山信仰の取次となった点も明らかにし、高野山・在地寺院・檀家３者の結びつきに注目している。こうした戦国期の東国社会での高野山信仰と真言宗寺院のありようについて、付論１では、上総国を事例として檀那所争論を取り上げて分析し、付論２では、武蔵国豊島郡の真言宗寺院三宝寺の住持賢珍と公家山科言継の結びつきから分析している。

第２章では、中世における東国の人々による西国の霊地への参詣について考察している。まず、中世前期の熊野参詣について、鎌倉期において先達を介在した檀家と御師との師檀関係を基盤として巡拝システムが構築されていることを確認し、熊野が中世前期より東国から西国へ向かう玄関口として機能していたと位置づけている。ただ、「玄関口」の意味がわかりにくく、西国全体を通しての説明が必要であろう。つぎに弘法大師ゆかりの高野山と四国を取り上げ、高野山信仰には東国各地にいた高野山の修行僧が支えていたことや、東寺、高野山、そして四国との結びつきを考察し、15 世紀の段階において、その関係が東国にも広く周知されていたことを指摘する。また、西国、秩父、坂東巡礼が、戦国期において既に現在に近い形で整備されていたとし、諸国巡礼はそれらの巡礼と修行とによって成就されるという認識を広く持っていたことを指摘する。さらに、高野山の旦那帳売買につい

て分析し、実態を明らかにしようと試みる。

伝来する史料が極めて少ない時代・分野についての研究であり、古文書や日記だけでなく、仏教説話や縁起、奉納札、檀那帳（過去帳）などにも目を向け分析している点は視点としても興味深く、考察の内容とともに高く評価できよう。本章においては、個別の霊地参詣を分析した上で、中世における霊地への参詣を、特定のものに限らず総体的に考察しており、それら個別の霊地参詣が連関しながら展開していたことを指摘している点が本章の特徴となっている。なお、霊地参詣を支えた東国各地の真言宗・天台宗の展開について、付論３としてまとめている。

第３編では、中世および近世における熊野信仰と富士山信仰について考察する。

第１章では、中世東国における熊野信仰を取り上げるが、ここでは、下総国における展開を中心に考察する。下総国での熊野信仰の展開は、旧利根川流域にみられ、葛西～風早～下河辺をつなぐ河川水運とそれに面した地域を御師が活動の拠点としていたことを明らかにし、そのうえで、聖護院門跡准后道興（近衛房嗣子）が著した『廻国雑記』から、拠点とした地域は経済・政治・交通・文化・宗教などが展開した関東水系の要所であったことを明らかにしている。この点は、宗教・信仰が単にそれのみで展開したのではなく、当該期の社会・経済・流通状況に結びついて展開したことを指摘したものであり、大きな視点から捉えた論考として評価できよう。

第２章では、戦国期における本山派修験の展開と領主との関係を、争論などの資料から考察している。そこでは、戦国大名北条氏領国下での動向を検討しているが、従来聖護院門跡が行っていた修験のもつ檀那場の設定を戦国大名が自ら行うように変化していったことを指摘し、戦国大名による組織化が行われ、本山による在所の修験支配は変質し、形骸化していったと位置づける。そして、その画期となったのは、天正７年（1579）に起きた修験間の争論であったとする。第１章では、社会･経済･流通とのかかわりから宗教･信仰を捉えたが、ここでは、領主支配･政治動向が宗教･信仰に深く関わってくる状況を捉えており、第１章とともに多角的に当該期の宗教・信仰を捉えた研究として、これまでにはあまりみられない貴重な研究として位置づけられる。

第３章では、武蔵国豊島郡における熊野信仰の展開の様子を捉える。まず、郡内の熊野神社の勧請･創建時期はおよそ 11 世紀～ 15 世紀であることを確認し、この時期は豊島氏が領主支配を展開した時期と重なることを指摘する。そして、熊野社は豊島氏の本拠や城館近辺に祀られ、豊島氏の展開とともに信仰圏が拡がったこと、港湾や河川交通の要所には西国との流通ルートを確保していた紀州出身の商人が展開し、強い相関関係にあったとする。また、近世において江戸北郊で展開する「六阿弥陀詣で」を取り上げ、その成立過程を捉え、紀伊国熊野本宮の本地仏のひとつが阿弥陀如来であり、阿弥陀信仰と熊野信仰が一体となって広まったことを想定する。

第４章では、戦国期の富士信仰における吉田・河口の御師の活動と戦国領主のかかわりについて考察している。まず、戦国期には既に多くの道者坊（宿坊）があり、道者の宿泊・潔斎、入山料の徴収といった共通した機能を果たしていたとし、旦那場の管理状況について述べる。小田原北条氏・小山田氏などの領主は、道者を保護・優遇する政策をとっていたことを明らかにするとともに、関銭を徴収することにより経済的基盤を形成していったともする。さらに、御師のもつ広範囲な行動力や情報

収集能力、交際関係を領主が諜報活動や外交の手足として利用していたことを指摘している。戦国期の宗教者と領主権力とのかかわりや、富士参詣活動の多面性を明らかにしていることは重要な指摘であると言えよう。

第５章では、近世に展開した富士講について、中山道板橋宿を拠点とした永田講と川越往還上板橋宿を拠点とした山万講を対象として考察している。板橋宿で展開した永田講については、職人層を中心に構成された江戸と異なり、宿内の比較的有力な商人層とその店子によって構成されるという特色があったことを指摘し、上板橋宿の山万講は宿全域に展開し、字単位で組織化されたが、講の結成から僅かな期間にその一部が永田講へと変化していったことを明らかにしている。そして、近世後期に江戸八百八講といわれるほど爆発的な拡がりをみせた富士講が、時を経ずしてその周辺地域、江戸郊外にまで拡がっていったことを明らかにし、都市と周辺地域との密接な連動性を指摘している。近世以降の富士講の研究については、民俗学の立場から研究が蓄積されているが、その一方で、歴史学的なアプローチをした研究は数少ない。本論文には新たな発見もあり、近世の富士講への理解を深める貴重な研究と位置づけられよう。

第４編では、戦国期における曹洞宗の展開にともなって派生した信仰や文化について考察する。

第１章では、下総国の正泉寺が、「日本最初女人成仏血盆経出現第一道場」として地誌で紹介されていることを取り上げ、開基法性尼と血の池に見立てられた手賀沼から血盆経が出現したことを紹介する。

第２章では、武蔵国の円福寺が所蔵する坐像が道元禅師像とされてきたことに対し、円福寺の由緒や太田道灌ゆかりの他寺に伝来する太田道灌像との比較、像容などから、太田道灌像であることを指摘している。丁寧な分析を多角的に行い、総合して考察し、坐像を再評価したものである。

第３章では、曹洞宗の展開にかかわりの深い温泉について考察している。中世末期から近世初期にかけての東国について、上野国の草津温泉と伊香保温泉を事例としている。本章では、両温泉においては貴賤を問わず多様な人々が諸国から湯治に来ていたことを明らかにし、そこでは衆生の病気の救済にあたる薬師如来を本尊とする寺堂が展開し、礼拝対象となっていたとし、温泉の維持管理には、湯銭（温泉使用料）や湯大明神や温泉薬師への勧進銭が充てられていたことを確認している。そして、こうした温泉場は、山岳信仰における霊場と同様に捉えることができ、そこでは山伏や修験といった宗教者の存在が想起でき、これら信仰に基づく修行は、霊山・霊場としての温泉湯治に大きな影響を与えたとする。また、草津温泉は、深山という立地にあり、苛酷な自然環境との共存が図られ、入山期間も限定されていたことを明らかにし、同じく入山時期が集中し、自然と融合する山岳信仰と多くの共通点があったことを見いだしている。曹洞宗は上野国において積極的な展開をみせるが、こうした湯治による療治や救済を求める衆生が集う温泉場を布教のための一拠点とし、檀那の獲得を図ったとする。また、温泉のもつ無縁性・公界性についても言及し、豊臣秀吉が草津温泉に湯治に赴き御殿を建てようとした行為は、草津温泉において中世に有していた公界性・無縁性を否定するものとなり得るものであったと位置づけている。中世の公界性・無縁性が近世的行為によって否定されようとしたことを捉えた興味深い指摘である。こうした東国における曹洞宗の展開に関して、付論４では、曹

洞宗寺院の輪住制度のもとで、瑞世請状など僧侶に関わる古文書が移動していくことを捉え、研究対象となる寺院だけでなく、関連する諸寺院の調査研究の重要性を述べている。

以上、本論文は、「中・近世の東国における宗教とその展開」と題し、中世から近世の東国社会を対象とし、宗教・信仰が人々のなかでどのように展開していったのかを論考したものである。

本論文の特色は、まず、中世期については、西国と比べて格段に史料の少ない東国を対象とした歴史研究であり、古文書・日記だけでなく、仏教説話や縁起、奉納札、檀那帳（過去帳）なども研究対象とし、研究手法として、それらを比較し、慎重に整合性をとりながら分析し、当該地域に現存する史料だけでは見いだせない新たな成果を結実させている点である。

つぎに、宗教・信仰の展開について課題としているが、本論文の特徴は、一宗派だけを取り上げ、その教線や信仰の展開をみるのではなく、広く多様な宗教・信仰を、それぞれ個別に分析し、それらを総合して、当該期の宗教・信仰について総体的に捉えようとしている点であり、単に東国社会にとどまらず、西国への信仰にも言及した全国的な視野をもつ研究であることである。その際、特筆されるのは、宗教や信仰、そして宗教者の問題を、それを取りまく領主支配や政治権力、社会情勢や流通経済との関連から分析している点である。とくに、研究対象地に対する的確な地理感覚をもち、地域における社会的拠点・経済・流通の拠点と信仰や寺院・宗教者の教線の拡大を結びつけて捉えた点は、重要な指摘をもつ研究として高く評価されよう。

本論文は、現在の研究状況において、上述したようなさまざまな重要な指摘を行い、独自の見解を打ち出した研究と位置づけられるが、その上で要望したいのは、中世と近世との連続性・非連続性の問題をどう捉えるかについて言及することである。本論文中においては、近世前期についての研究が薄く、今後の課題となろう。また、本論文の構成にもう一工夫あると、中近世東国で展開した宗教について、総体的に捉えやすくなると考えられる。著書として公表するときに検討されることを期待する。

しかし、上記の留意点はあるものの、当分野についての現在の研究状況に照らしても、決して劣るものではなく、研究の視点、分析方法もよく、十分に水準を超えた独自の見解をもつものであることは間違いない。本論文について、審査委員一同は、博士論文に値するものとして高く評価し、吉田政博（学位申請者）が博士（歴史学）の学位を授与されるに値するものと考える。

主査　中野　達哉
副査　久保田昌希
副査　林　　譲